

2015. 12  
No.15

認定 NPO 法人 C.P.I.教育文化交流推進委員会

発行所 : C.P.I.スリランカ事務所

Mahindarama Road,Etul-Kotte,Kotte,SriLanka

日本本部: 東京都三鷹市中原 2-16-9 Tel:0422-49-3808

E-mail : [cpimate@gmail.com](mailto:cpimate@gmail.com)URL: <http://www.cpi-mate.gr.jp>ホームページ <http://www.cpi-mate.gr.jp>URL English <http://cpimate.com>

## 日本の教育里親さんの支援のおかげです

スリランカ-日本教育文化センター

スリランカの協力団体 SNECC の設立 30 周年をお祝いして

C.P.I.会長 小 西 菊 文

スリランカの首都、偉大な大統領であった方の名を記念して名づけられた首都ジャヤワルダナプラ・コッテ市にある湖畔に日本から贈られた国会議事堂があります。その対岸の湿地にある小高い丘に教育研究所を建てるようになると、教育者として知られた僧侶サンガッカーラ師が弟子の中から U.スマンガラ師と M.チャンダシリ師ほか数人の僧侶を選ばれて土地を与えました。

そのときから、彼の地での貧しい子どもたちへ教育の機会を授ける活動が始まりました。1985年のことです。その後、スマンガラ師が日本に留学していたことが契機となり、SNECC(スリランカ-日本教育文化センター)と名づけられ日本との繋がりをもった活動が、始まりました。1986年のことです。それから 30 年が経っての来年です。C.P.I.が日本で初めて教育里親の公募に踏み切り、本格的に関わりだしたのは 1988 年ですから、SNECC の発足から二年後ということになります。

なぜ、C.P.I.が関わりをもつようになったのか、教育里親運動に求められることは何であるのか、「日本のお父さん、お母さん」とスリランカの子どもたちに慕われるような活動は、とりわけ、いまの日本の私たちにとって、どのような意味があるのか。

1999年に刊行し、会員の皆様のお手許にあります冊子「光輝く島の子どもたちから」には、そのような質問への答えが詰まっています。ですから、その内容は、いまも生きた教材として、高校・大学への出張授業や自治体『国際協力講座』の、テキストとして使うことができています。

ともに歩み、ともに喜びたい子どもたちの成長。今後とも力強くご支援ください

1993年に竣工した SNECC と C.P.I.の共同使用施設、その後に C.P.I.の資金で建てられた 1000 人もの子供たちが集う日曜学校の施設は、SNECC の教育活動の基盤となっています。今後の期待は、日本の若者たちと教育里子卒業生たちとが連携した、将来に向け



た何か……です。

その「何か」は、いま定かではありません。

しかし、私たちのしてきたことの延長線上に連なることをしてくれるだろうとの楽しみがあります。

その楽しみをもって、頑張っていきましょう。

# 里子たちとの交流とジャフナ・6つの世界遺産を巡る

## ★★★里子交流ツアー2015報告★★★

C.P.I.理事 牟田慎一郎

今回は、8月22日から31日までの10日間とちょっと欲張りな日程でした。福岡より4名、東京より2名がそれぞれソウル（仁川）に集合し、23:40発の韓国航空便に乗り込み、翌日23日早朝の4:30にコロンボへ到着。コロンボ空港には、インターン中の京都産業大学生（左端）らが出迎えてくれました。



コッテのスリランカ日本教育文化センター(SNECC)に到着後休憩。アートセレモニーに参加、オイルランプセレモニーの後、こどもたちの歌や踊りを楽しみました。

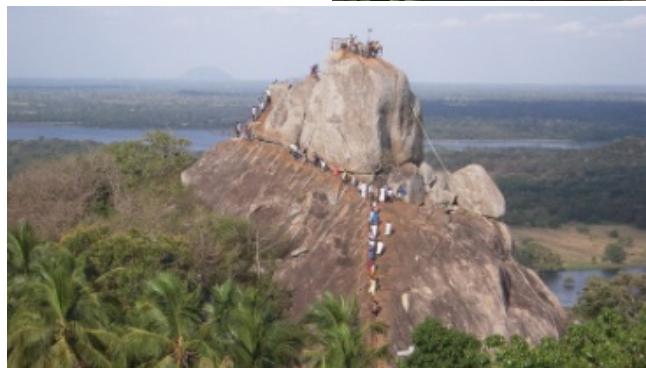


その後、里子と対面。元気な姿をこの目で確かめ、通訳を交えて現状を確認し励ましの言葉をかけるなど家族との交流を楽しみました。



翌朝、コロンボを出発し、専用車でスリランカ最初の王朝があったアヌラダプラへ移動し、3000人のお坊さんが食事をするための巨大な石のおひつの遺跡などを見学しました。

ミヒンタレの岩山の頂上は、いつも強い風が吹く珍しいところです。



この日は、アヌラダプラに宿泊し、翌日LTTE（タミル解放のトラ）の拠点となっていた地域を通過し、最北端の街ジャフナへと向かいました。2009年5月に内戦が終結しましたが、途中一か所のチェックポイントや、破壊された給水塔などがあるものの自由に訪れることができるようになっていました。



そこで、私の里子の家を訪問。前回訪れた時よりいいびん生活がよくなっているように感じました。しかし、その里子のお姉さんは、大学は卒業したものの、就職先がないとのこと。経済活動がもっとさかんになり、仕事が見つかるといいなと思いました。



オランダ統治時代の1688年に作られた星型の要塞や最北端のモニュメントへも訪れました。



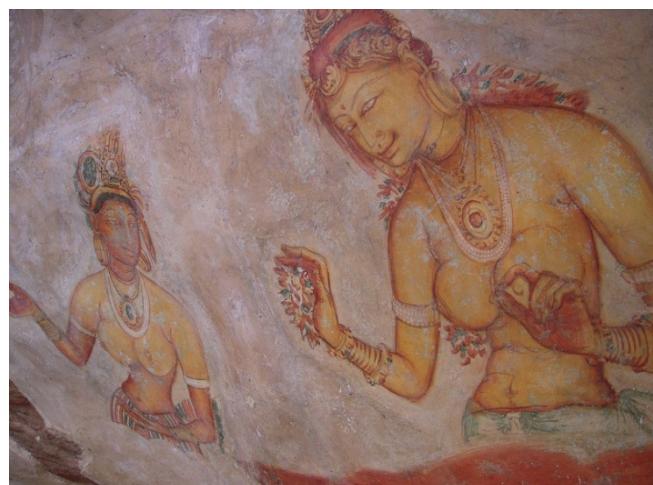
翌日、ジャフナを出てスリランカ中央部へ移動し、夕刻サファリを訪れ、湖に水を飲みに集まる象を見るることができました。壯觀でした。



26日は、スリランカ一番のみどころ、シギリヤを訪れ、王宮があった岩山シギリヤロックに登りました。



その中腹には、シギリヤレディと呼ばれるフレスコ画が1500年経った今も色鮮やかに残っているのに驚きました。



午後は、スリランカ第2の王朝があったポロンナルワを訪れ、もとは7階建てだったといわれる王宮や、水浴場など数々の遺跡を見学しました。



宿泊した、ダンブッラのアマヤレイクホテルではCPIの元里子に再会しました。里子が元気で活躍する姿を見ると、里親であることに喜びを感じます。



28日は、午前中、ダンブッラの石窟寺院を見学。紀元前3世紀に遡る歴史をもつこの寺院は、1991年に世界遺産に登録されました。



涅槃像を含むたくさんの仏像と天井に隙間なく描かれた仏画は、私たちの目を見張らせました。



スリランカ最後の王朝だったキャンディへ移動の途中、紅茶の店に立ち寄り買い物をして、店のレストランで昼食をとりました。その後、キャンディのホテルにチェックインし、夕刻より、スリランカ最大のお祭りであるキャンディペラヘラを鑑賞しました。



ペラヘラ祭りは、シンハラ歴のエハラ月（毎年7~8月）の満月の日を最終日とし約1週間行われ、背中に仏歯を乗せた象とともに大勢の踊り手が一緒に行進します。

翌日29日は、そのお釈迦さまの右の犬歯（4世紀の初めにインドから持ち込まれたといわれる）が祀られている仏歯寺を見学。運よくその聖体を見ることができました。



仏歯寺には、前日行進した象が何頭も体を休めていました。



仏歯が安置されている仏舍利

その後、紅茶の産地であるヌワラエリヤ高地へ向かい、途中、滝のそばで売っているトウモロコシをみんなで味わいました。車中から紅茶畑を眺めながら紅茶工場に到着し工場見学をし。紅茶の種類について勉強しました。スリランカは、インド、ケニアに次いで世界第3位の紅茶生産国です。その後、工場のレストランで食事をしました。



ヌワラエリヤの町は、標高が1800m以上の高地にあり、平均気温が年間を通じて15~17℃であり湿潤な気候から紅茶の栽培に適しているとともに、英國統治時代の避暑地として栄えたところです。私たちは、Galway Forest Lodgeという英國調のホテルに泊まりました。



最終日の30日は、朝ヌワラエリヤを出発し、ピンナワラの象の孤児院を訪れ、午前11時からの水浴の様子を見学しました。横のレストランで食事をした後、途中カシューナッツの専門店へ立ち寄った。その後コッテのSNECCへ戻り休憩後、16:00過ぎに空港へ向かい、19:00コロンボ発の大韓航空機で帰国の途につきました。

今回は、ジャフナと6つの世界遺産を巡るというちょっと欲張りな中身の濃い旅となりました。

来年は、SNECC創設30周年記念の旅を企画予定です。皆さんの参加をお待ちしています。



## スケジュール概要

<b>8月22日 (土曜日)</b>	17:00 成田発 19:25 仁川着 21:05 福岡発 22:35 仁川着 23:45 仁川発 (機中泊)
<b>8月23日 (日曜日)</b>	04:30 コロンボ着 スリランカ日本教育文化センター(SNECC)で休憩後 アートセレモニー鑑賞 里子と面会
<b>8月24日 (月曜日)</b>	アヌラダプラへ移動 アヌラダプラ観光 アヌラダプラ泊
<b>8月25日 (火曜日)</b>	ジャフナへ移動 ジャフナ観光1 ジャフナ泊
<b>8月26日 (水曜日)</b>	ジャフナ観光2 午後、ダンブッラへ移動 ダンブッラ泊
<b>8月27日 (木曜日)</b>	シギリヤ観光 ポロンナルワ観光 ダンブッラ泊
<b>8月28日 (金曜日)</b>	ダンブッラ観光 仏歯寺見学、夜ペラヘラ祭り鑑賞 キャンディ泊
<b>8月29日 (土曜日)</b>	紅茶工場見学 紅茶畑見学 ヌワラエリア泊
<b>8月30日 (日曜日)</b>	象の孤児院見学 SNECCへ戻り休憩 19:00 コロンボ発 (機中泊)
<b>8月31日 (月曜日)</b>	07:00 仁川着 08:00 仁川発 09:20 福岡着 17:40 仁川発 20:00 成田着

# 戦後 70 年 今日の日本の平和と発展を思う

## スリランカが救った日本国の大統領の分離統治案の廃案

# 日本の戦後復興に大きな貢献

## スリランカ、戦後日本を救う

戦後の日本にとって忘れてはならない大恩人がいる。太平洋戦争終結後に開かれたサンフランシスコ対日講和条約会議は、まさに日本にとって大きな岐路に立たされた大會議でした。

一部の国の大統領「日本分割論」に対しスリランカのジャヤワルデネ代表（後の大統領）は日本を擁護する大演説を行ったのでした。

私たち C.P.I. は 27 年にわたり、スリランカの子供たちを教育支援してきました。このことは僅かではありますが、その恩返しに値するかも知れません。もう一度、ジャヤワルデネ大統領の演説を認識し感謝をしたいと思います。

平成 3 年 4 月にその功績に感謝と報恩の意をこめて「石碑」（右）が鎌倉の大仏さんの横に建造されました。その後、長野の善光寺、ハ王子・雲龍寺にも銅像と顕彰碑が建てられました。



『人はただ愛によってのみ憎しみを越えられる  
人は憎しみによっては憎しみを越えられない  
法句経 五』

これは 鎌倉の石碑に刻まれた文字です。  
法句経とは、釈迦が一般の人に分かりやすく説かれた経の一つです。

『J・B・ジャヤワルデネ前スリランカ大統領顕彰碑』に刻まれている文言です

1951 年（昭和 26 年）9 月サンフランシスコ対日講和条約会議で日本と日本国民に対する深い理解と慈悲心に基く愛情を示されたスリランカ民主社会主義共和国ジュニアス・リチャード・ジャヤワルデネ前大統領を称えて、心から感謝と報恩の意を表すため建てられました。

前大統領はこの会議の演説に表記のブッダの言葉を引用されました。

「実にこの世においては怨みに報いるに怨みをもつてしたならば、ついに怨みの息むことがない。  
怨みを捨ててこそ息む。これは永遠の真理である。 「ダンマパダ」 5

前大統領は講和会議出席の各国代表に向って日本に対する寛容と愛情を説き、日本に対してスリランカ国（当時セイロン）は賠償請求を放棄することを宣言されました（注 1）。

さらに「アジアの将来にとって、完全に独立した自由な日本が必要である」と強調して一部の国々の主張した日本分割案に真っ向から反対して、これを退けられました（注 2）。当時日本国民はこの演説に大いに励まされ勇気づけられ、今日の平和と繁栄に連なる戦後復興の第一歩を踏み出しました。

1991 年（平成 3 年）4 月 28 日

サンフランシスコ講和会議 40 周年記念  
ジャヤワルデネ前スリランカ大統領顕彰碑

## スリランカ—日本の深い絆は永遠に続くでしょう

この大演説以後、同国との関係は更に深くなっていました。当時の総理大臣・吉田茂は「日本人はこの大恩を後世まで忘れてはならない」と語ったそうです。昭和天皇、天皇陛下も皇太子時代に公式訪問されています。昭和天皇の御崩御の際は「大喪の礼」に同氏は隣席されています。政府は今も政府開発援助（ODA）の重要な協力先としてスリランカを位置付けております。



### 八王子・雲龍寺に建てられている銅像

親日家のジャヤワルダナ大統領の暖かな心は今も生きている

親日家であったジャヤワルダナ大統領は多くのエピソードを残しています。同大統領は自分の死後、片方の眼の角膜をスリランカ人に、もう片方の角膜を日本人に提供して欲しいという遺言を残して亡くなったそうです。死後そのことが実現され、その為か、現在でもスリランカから日本へ

の角膜提供率は“世界一”だそうです。また、生前、旧国鉄が、JRとなった時、彼は、今でも日本は、感謝の念を忘れずにいてくれていて、自分の頭文字であるJ. R.ジャヤワルダナのJRをつけてくれたと信じて疑わず、親族を呼んで、共にJR東日本の列車に乗ったそうです。

《注釈》 文中の注釈をスピーチの中から抜粋しました。(駐日スリランカ大使館資料より)

(注1) セイロンに於ける我々は、幸い侵略を受けませんでしたが、空襲により引き起された損害、東南アジア司令部に属する大軍の駐屯による損害、並びに我国が連合国に供出する自然ゴムの唯一の生産国であった時に於ける、我国の主要産物のひとつであるゴムの枯渇的樹液採取によって生じた損害は、損害賠償を要求する資格を我国に与えるものであります。我国はそうしようとは思いません。何故なら我々は大師の言葉を信じていますから。

(注2) 大師（ブッダ）のメッセージ、「憎しみは憎しみによっては止まず、ただ愛によってのみ止む」はアジアの数え切れないほどの人々の生涯を高尚にしました。 仏陀、大師、仏教の元祖のメッセージこそが、人道の波を南アジア、ビルマ、ラオス、カンボジア、シャム（タイ）、インドネシアそれからセイロン（スリランカ）に伝え、そして又北方へはヒマラヤを通ってチベットへ、支那へそして最後には日本へ伝えました。 これが我々を数百年もの間、共通の文化と伝統でお互いに結びつけたのであります。 この共通文化は未だに在続しています。 それを私は先週、この会議に出席する途中、日本を訪問した際に見付けました。

又日本の指導者達から、大臣の方々からも、市井の人々からも、寺院の僧侶からも、日本の普通の人々は今も尚、平和の大師の影の影響のもとにあり、それに従って行こうと願っているのを見いだしました。

我々は日本人に機会を与えて上げねばなりません。そうであるから我々は、ソ連代表の云っている、日本の自由は制限されるべきであるという見解には賛同出来ないです。

☆大統領のスピーチの原文は下記からご覧になれます。

([http://www.d7.dion.ne.jp/~tomoca/nettaigo/address\\_ir\\_e.htm](http://www.d7.dion.ne.jp/~tomoca/nettaigo/address_ir_e.htm) )

(編集:事務局) 同記事は以前、北海道地域会、千葉地域会が地域会報で報じています。

# ヨンニチノ!

## 私たち スリランカから来ました 東京・多摩動物公園の人気者

### 仲良し2頭、元気です

平成24年、日本とスリランカが国交樹立してから60周年を迎えたことから、これを記念して平成24年2月に多摩動物公園に2頭の子象がスリランカから贈られました。メスのアマラちゃん(Amar)永遠には2,004年10月29日生まれ(11歳)、



仲良しのアマラちゃん(左)と ヴィドゥラちゃん(右)

そしてオスのヴィドゥラちゃん(Vidula:賢い、利口な)は2007年8月25日生まれ(8歳)です。2頭の子象は、スリランカ ピンナワラ・象の孤児園の生まれです。

### 62歳アヌーラも健在、絵本になったエピソード

多摩動物公園では、以前からスリランカ象、アヌーラ(オス:現在62歳)がいました。アヌーラは1956年、当時のセイロン政府ソロモン・バンダラナイケ首相から日本の子どもたちへ、三笠宮両殿下を通じて寄贈されました。1958年アヌーラは5歳年上のメス「タカコ」とともに、新しく開園した多摩動物公園へ移動した。

1979年、病気になったアヌーラ(当時26歳)をタカコとガチャコ\*が、自力で立てないアヌーラに寄り添い、ひたすら支え続け、アヌーラの病が治るまで2ヶ月間も支え続けた。(※後から入園した若い象)  
(この出来事は「ともだちをたすけたゾウたち」という絵本になっている)

### 仲間が全国に14頭、愛されています

スリランカ象(セイロン象)は多摩動物園のほか、千葉市動物公園、名古屋市東山動植物園、周南市徳山動物園、徳島市とくしま動物園、北九州市到津の森公園で飼育されています。スリランカ象は絶滅危惧種として、ワシントン条約では輸出入を行ってはならない生き物のうちの一種です。日本に贈られた象たちは種の保存と研究を目的として移動されることになっています。仏教とともに日本とスリランカを深く繋いでくれる存在スリランカ象、これからも元気で健やかに育って、私たちに癒しと喜びを与えてほしいですね。



記事編集:山川

### ピンナラワ・象の孤児園

キャンディの西、約30kmにあります。ジャングルで親を亡くしたり、はぐれたりした子象、50頭余りを保護している施設です。ここで育った象たちは寺院や象使いのもとに引き取られてゆきます。C.P.I.の里子交流ツアーでは、通常の見学コースにしています。

